

# 四谷の

# 千枚田だより



第 148 号

## 収穫感謝祭

十二月六日、ふれあい広場を会場に恒例となった「収穫感謝祭」を開催、二百人近くの参加者で賑わった。冒頭、会長は、「今日、ご参加の皆さん全てが四谷の千枚田の魅力に魅せられた方々とお察しいたします。厳しい条件で棚田を守る百姓は大変な労力を費やし頑張っております。そんな、こんなを善い眼でしっかりと見て頂き、感謝祭が来年も、また、四谷の千枚田が未来永劫、保全、継承していく為には皆さんの



応援、支援がなくては成り立ちません。無理を言いませんが、協力金

箱・志で誠意を示して頂ければ、棚田の百姓は単純、お人好しです。棚田の保全継承、各種イベントの開催等を喜んで継続する覚悟です。今日、ここにご参集の皆さん一人ひとりが「お施主」になったつもりで師走の一日を楽しみましょう。」と、あんに協力金箱、寸志をお願いする挨拶から餅つきが始まった。この、感謝祭には毎年、協力頂いている「河西忍とゆかいな仲間」のお馴染みメンバーが土・日の音楽活



動の忙しい中、今日を予定に駆けつけて頂いた。

四谷の千枚田で育農に取り組み新城高校の農業クラブや写真部、商業課の生徒さん達も写真作品展示や農産物の販売を行うなど、会場に華を添えて頂いた。物品販売の生徒に「買ってくれるかん」と聞くと「ぼつぼつ」と、やや淋しい返事が返ってきた。「棚田のおっかさんは心が優しいで、みな売れちゃうから」と励まし、購買促進のアナウンスをしたところ見事に完売。生徒たちの明るい笑顔がより可憐に見えた。

今では滅多に食べられない「ずずはら糰」七臼を搗き、あんこ、大根おろし、黄粉などで振る舞い、ひと白ごとに行列で、振る舞うおっかさ



んは「わしゃあ、食んで済んじゃった」と苦笑い。シシ汁も、大はそり二杯が早々と完食、好評であった。



棚田っ娘の五平餅はやっぱり旨いのか、シシ汁、焼き肉、餅を鱈腹食った挙句にも関わらず完売。今日の参加者は皆んな「別腹」を持っていた?・・・すべてが、目出度しめでたし





## ほの国自然ソムリエ学校

愛知県では、地域で自然の保全保護活動に参加している人、自然の保全保護に関心ある人を対象に、生物の生息生育空間の保全保護や再生の知識と実践を学ぶ場所として“ほの国自然ソムリエ”学校を九月五日に開校した。(受講生三十名)

(舜)は受講生に向けて特別野外講座講師、エコツアーでの講師を依頼され十月十日、十一月十五日、二十二日の三回、受講生(一般参加者を含む)に地域の生態系維持(田園自然再生など)の一つの方向、あり方などを説いた。同校受講生成果・提案フォーラムと閉校式は来年の二月二十日に愛知大学で行われる。



## 学芸会

十一月二十二日、連谷小閉校記念事業の一環として全校児童三名に各種団体、一般を含め、約百五十人が参加、午前はお茶会、文化展、午後の学芸会の最大の見ものは、児童と先生方の「一休さんパートII」で、長台詞を完璧に熟した。特に、一年生の松下君の物怖じしない演技は観衆も圧倒された。また、卒業生のプラスバンド、明老クラブ有志による旧連谷小学校校歌斉唱など、多様な熱演に大喝さい、閉校を惜しんだ。



## 田起こし&田んぼ跳び

十二月九日、来年から鳳来寺小学校に統合する連谷小(三名)、海老小(十三名)、鳳来寺小(二十一名)の児童は共に体験活動を行うことにより、親睦を深め、交流を図ることを目的に田起こしと田んぼ跳びを行った。



初めに連谷小岡山校長先生から四校が統合する新しい学校でも千枚田活動を引き継いでもらえるように呼びかけられた。田起こし作業は連谷小の三名が先生になり低学年の一、二年生は松下佑翼君が三、四年生は中村真帆ちゃん、高学年は

土方陽平君が備中で土を掘り起こす田起こし作業を実演し、それぞれが三枚の田起こしに挑戦した。

田んぼ跳びは高いところでは二メートルを超す石積田もあり、怪我などがないよう、本日の指導を依頼された(舜)が安全な跳びかたを四人の女性教員と共に十数段の田んぼ跳びを実演、七十五歳を超す(舜)が一番となり、恥ずかしながら年老いた鉄人をアピールした。

三年生以上は四班に分け、大岩から約五十メートルの段々田んぼを全速で跳び下り、また、駆け上がることを三回繰り返した。一、二年生は半分のコースを同様に真剣に挑戦した。

田んぼ跳びは平成十九年から恒例活動として行なわれており、子供たちの真剣に取り組む姿を見て、四谷の千枚田でなければできない、記憶に残る野外活動、楽しい遊びであることと実感した。

**お知らせ** 連谷公民館から  
一月三日(日)、連谷会館を会場に正午から恒例の新年祝賀会を開催します。

閉校に伴う地域の過渡期を問う大切な機会でもあり、大勢の参加をお願いします。

行 平成二十七年十二月二十日  
鞍掛山麓千枚田保存会  
発 文 責 小山舜二